

# 中国西南部におけるミャオ族の刺繍継承に関する研究

平成 19 年入学  
派遣先国：中華人民共和国  
佐藤若菜

キーワード：中国，ミャオ族，女性，刺繍，継承

## 対象とする問題の概要

中国西南部に住むミャオ族の民族衣装は色鮮やかで、国内外を問わず多くの写真集や紹介書が出版されてきた。衣装の型やそこに施される刺繍のモチーフは種類が豊富で地域ごとに異なり、これまで主に漢族の視点からミャオ族が衣装によって分類される傾向があった。

ミャオ族社会は父系的親族組織によって特徴づけられ、土地の継承権は男性のみにある。一方、民族衣装や銀装飾といった財産、そして刺繍の技は母親から娘へ贈与・伝授されてきた。

1950 年代の民族識別工作期に書かれた文献によると、婚姻においては同宗不婚、同姓不婚といった、漢族と共通した特徴を持つことに加え、配偶者は共通の言語・服飾・生活様式をもつ集団から選ぶ。また、共通の衣装によって標識される外婚集団があり、女性は一生を通して同型の衣装を着る。このことが、刺繍の継承を支えてきたといえる。



写真 1 市場で既製服を選ぶ女性

## 研究目的

本研究は、母から娘へ伝えられてきたミャオ族の刺繍が、現代中国における社会的・経済的変容の中で、どのように継承されているのか、その技術はどのように持続・変容しているのかを明らかにすることを目的とする。現在、博士予備論文にむけて、ミャオ族の婚姻、親族・家族関係について文献を整理している。ただし、中国語文献に書かれていることは、今日的な状況を必ずしも反映していない。現在、中国では大きな社会経済的変化が生じており、そうした背景を踏まえた上で実態を把握するためにも、フィールドワークが必要である。

## フィールドワークから得られた知見について

1984 年、中国は農民の地方都市への移動を認可した。それによって、農村出稼ぎ者の都市流入が始ま

り、現在では常態化している。今回訪れた雲南省文山チワン族ミャオ族自治州、貴州省黔東南ミャオ族トン族自治州においても、母親もしくは娘が出稼ぎに出ている世帯は少なからず見受けられた。しかし、村を歩いていると、玄関口で小さな椅子に座り刺繍をする女性、市場でものを売りながら、もしくは赤ちゃんを背中におぶいながら刺繍をする女性など、様々な場面で刺繍に励む女性がいた。中でも驚いたのが、数人のグループで刺繍をしている人たちがいることである。多いときでは10人程の女性が円になって黙々と手仕事をしていた。誰かが指導するでもなく、ただ自分の仕事をこなしているようだった。それから、もう一つ気づいたことは、刺繍をしている女性に対して、声をかけたり、アドバイスをしたりする人が男女を問わず多くいることである。実際に、私が知り合いの玄関口で刺繍をしてみると、通りすがりの女性が「どこで習ったの?」「この技術はこの地域にはない」などと声をかけるだけでなく、

ここはこうした方がいいよといったアドバイスをくれることもしばしばあった。ミャオ刺繍は「母から」だけでなく、様々な人間関係を通して、受け継がれているのかもしれない。

刺繍技術を習い始める年齢についても、文献とは異なる知見が得られた。文献には、「4、5歳から刺繍を習い始める」と書かれているが、今回訪問したいくつかの村では、義務教育期間に刺繍を習うケースはほとんどなかった。卒業後、都市へ出稼ぎに行かず、実家に残る場合にのみ、女子の技術伝習が実現していた。



写真2 玄関口の風景

### 今後の展開・反省点

今回は、漢語による調査だったため、ミャオ語によるミャオ族どうしの会話を聞き取れなかった。予備論文執筆後は、まずミャオ語を習得し、貴州省で本格的なフィールドワークに臨みたい。



写真3 貴州省台江県台拱の刺繍